

平成24年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

新 通 遺 跡

丸 瀧 遺 跡

館 屋 敷 館 跡

元 狭 口 遺 跡

大 塚 遺 跡

花 立 遺 跡

舞 台 遺 跡

釜 淵 遺 跡

宮 寄 上 地 内

中 沢 遺 跡

2013

新潟県加茂市教育委員会

平成24年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

新 通 遺 跡
丸 瀉 遺 跡
館 屋 敷 館 跡
元 狭 口 遺 跡
大 塚 遺 跡
花 立 遺 跡
舞 台 遺 跡
釜 淵 遺 跡
宮 寄 上 地 内
中 沢 遺 跡

2013

新潟県加茂市教育委員会

序

山紫水明の地「北越の小京都」加茂市には、その豊かな自然に育まれた悠久の歴史が地下に埋蔵文化財として存在しています。現在までに、175か所が遺跡登録されています。

加茂川の上流部にはところどころに段丘がみられ、旧石器時代や縄文時代の遺跡が多く確認されています。丸山遺跡は二万年前旧石器公園として平成18年に整備され、市民の皆様から親しまれています。また、加茂川下流域や下条川流域の平らな水田の下からは古墳時代～平安時代の遺跡が多く発見されています。丘陵上には古墳も確認されています。市内の各所に先人たちの営みがあり、貴重な文化財として埋蔵されています。

現代の私たちは様々な開発事業を計画する中で、埋蔵文化財の存在を無視することはできません。遺跡がやむを得ず破壊される場合は、記録として保存し、後世に引き継ぐ責務があります。

本書はそうした開発事業と文化財保護との調整をはかるために行われた試掘・確認調査の結果報告書です。平成24年度には、9遺跡と1地内において調査を行いました。いずれも小規模な調査で、目を見張るような成果があるものではありませんが、各調査は各地域における歴史の記録として、今後活用されることを願っています。

このたび、本書を刊行することで、当地域の学術・研究資料として多くの皆様に活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護思想が深まれば、この上なく幸せであります。

最後に、発掘調査に対して様々なご指導とご協力を頂いた新潟県教育庁文化行政課、並びに発掘調査に参加された地元の方々、地権者および工事関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成25年12月

加茂市教育委員会

教育長 殖 栗 敏 夫

例 言

- 1 本報告書は、平成24年度に新潟県加茂市内の各種開発に伴い実施した9遺跡、1地区における試掘・確認調査および工事立会い調査の記録である。
- 2 調査は新通遺跡・丸湯遺跡・館屋敷館跡・元狭口遺跡が道路建設工事、大塚遺跡が排水路改良工事、花立遺跡・舞台遺跡・釜淵遺跡が下水道工事、宮寄上地内・中沢遺跡が民間開発に伴い実施したものである。
- 3 試掘・確認調査の経費は、国庫および県費の補助金交付を受けた。
- 4 調査は加茂市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教 育 長	殖 業 敏 夫
総 括		社会教育課長	金子 正文
庶 務		社会教育課主査	石井美代子
調査担当		社会教育係係長	伊 藤 秀 和
現場作業員	石田 卓・金子貞雄・坂上良栄・田浦善榮・千葉泰行・中川賢一・中野規美雄・松田重信		(公益社団法人加茂市シルバー人材センター会員)
整理作業員	櫻井恵美子		
- 5 調査記録図面・写真類、出土遺物は一括して加茂市教育委員会が保管している。
- 6 本書で示す方位はすべて真北である。
- 7 挿図に使用した既存図面については、その出典を記した。
- 8 本書に掲載した遺物は各遺跡毎に通し番号を付し、本文および観察表・挿図図面・写真図版の番号はすべて同一としている。
- 9 写真図版1・3の調査地遠景写真は、平成10年の本調査に伴い撮影したものを使用した。
- 10 写真図版9の空中写真は(株)オリスが平成3年11月に撮影した縮尺約1/12,500×85.83%のものを使用している。
- 11 引用・参考文献は著者と発行年(西暦)を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載している。
- 12 本報告書の執筆と編集は、第VI章については(株)バリノ・サーヴェイに試料を委託し、同社より原稿を頂いた。そのほかの執筆と編集はすべて伊藤秀和が行った。
- 13 土器の写真撮影、挿図、写真図版の版組みおよび全体のデジタル編集、データ化は、(有)不二出版に委託した。
- 14 木製品の写真撮影および実測は、フォーカルに委託した。
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。(敬称省略・五十音順、機関などは順不同)
有本 努・池野芳男・石附栄一・大橋 繁・小熊博史・小野本 敦・春日真実・近藤信行・坂上信一・滝沢規朗・田村浩司・立木宏明・中野賢司・嶋海忠夫・吉村 修・吉村光恵
ソフトバンクモバイル(株)・(株)バルコムコミュニケーションズ・星野電気(株)・(社)加茂市シルバー人材センター・小柳建設(株)・(株)平成建設・(株)堀内組・(株)渡辺建材・(株)山本建材・熊倉組・中越大栄工業(株)・加茂郷土地改良区・加茂市下水道課・加茂市建設課・加茂市都市計画課・新潟県教育庁文化行政課・新潟県三条地域振興局・加茂市文化財調査審議会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 平成24年度事業の概要	1
2 遺跡の位置と環境	2
第Ⅱ章 道路建設工事関連	3
1 調査に至る経緯	3
2 新通遺跡	4
(1) 遺跡と確認調査の概要	4
(2) 層 序	4
(3) 遺構と遺物	5
(4) 調査のまとめ	5
3 丸湯遺跡	6
(1) 遺跡と確認調査の概要	6
(2) 層 序	7
(3) 遺構と遺物	7
(4) 調査のまとめ	7
4 館屋敷館跡	10
(1) 遺跡と確認調査の概要	10
(2) 層 序	11
(3) 遺構と遺物	11
(4) 調査のまとめ	11
5 元狭口遺跡	12
(1) 遺跡と確認調査の概要	12
(2) 遺構と遺物	12
(3) 調査のまとめ	12
第Ⅲ章 農業基盤整備事業関連	13
1 調査に至る経緯	13
2 大塚遺跡	13
(1) 遺跡と確認調査の概要	13
(2) 層 序	14
(3) 遺構と遺物	14
(4) 調査のまとめ	14
第Ⅳ章 公共下水道工事関連	16
1 調査に至る経緯	16
2 花立遺跡	17
(1) 遺跡と立会い調査の概要	17
(2) 遺構と遺物	17
(3) 調査のまとめ	17
3 舞台遺跡	17
(1) 遺跡と立会い調査の概要	17
(2) 遺構と遺物	17
(3) 調査のまとめ	17
4 釜淵遺跡	18
(1) 遺跡と立会い調査の概要	18
(2) 遺構と遺物	18
(3) 調査のまとめ	18

第V章 民間開発関連	19
1 調査に至る経緯	19
2 宮寄上地内	19
(1) 調査対象地と試掘調査の概要	19
(2) 層序	19
(3) 遺構と遺物	19
(4) 調査のまとめ	20
3 中沢遺跡	21
(1) 遺跡と確認調査の概要	21
(2) 層序	21
(3) 遺構と遺物	21
(4) 調査のまとめ	21
第VI章 丸瀉遺跡の自然科学分析	24
1 はじめに	24
2 放射性炭素年代測定	24
(1) 試料	24
(2) 分析方法	24
(3) 結果	25
3 樹種同定	25
(1) 試料	25
(2) 分析方法	25
(3) 結果	26
(4) 考察	26
第VII章 まとめ	28
1 平成24年度調査成果について	28
2 丸瀉遺跡と周辺地域の柱根樹種について	28
《引用・参考文献》	30
《別表》	32
《報告書抄録》	巻末

挿図目次

第1図 調査対象遺跡・地区位置図	2	第16図 大塚遺跡確認調査トレンチ位置図	15
第2図 新通遺跡推定範囲と調査対象地位置図	4	第17図 大塚遺跡確認調査トレンチ土層柱状図	15
第3図 新通遺跡確認調査トレンチ位置図	5	第18図 遺跡推定範囲と調査対象地位置図	16
第4図 新通遺跡確認調査トレンチ土層柱状図	5	第19図 釜淵遺跡推定範囲と調査対象地位置図	18
第5図 丸瀉遺跡推定範囲と調査対象地位置図	6	第20図 宮寄上地内試掘対象地と周辺の遺跡位置図	20
第6図 丸瀉遺跡確認調査トレンチ位置図	8	宮寄上地内試掘調査トレンチ位置図	20
第7図 丸瀉遺跡確認調査トレンチ土層柱状図	8	第22図 宮寄上地内試掘調査トレンチ土層柱状図	20
第8図 丸瀉遺跡確認調査1トレンチ模式図	9	第23図 中沢遺跡推定範囲と調査対象地位置図	22
第9図 丸瀉遺跡出土遺物	9	第24図 中沢遺跡確認調査トレンチ位置図	22
第10図 館屋敷館跡推定範囲と調査対象地位置図	10	第25図 中沢遺跡確認調査トレンチ位置図	23
第11図 館屋敷館跡確認調査トレンチ位置図	11	第26図 中沢遺跡確認調査トレンチ土層柱状図	23
第12図 館屋敷館跡確認調査トレンチ土層柱状図	11	第27図 中沢遺跡出土遺物	23
第13図 元狭口遺跡と周辺の遺跡位置図	12	第28図 木材	27
第14図 既往の確認調査と調査対象地位置図	12		
第15図 大塚遺跡推定範囲と調査対象地位置図	14		

目 次

第1表	平成24年度発掘調査工程表	1	第4表	樹種同定結果	25
第2表	館屋敷館跡確認調査履歴一覧	10	第5表	加茂市周辺の柱根樹種一覧	29
第3表	放射性炭素年代測定および暦年較正結果	25			

写真図版目次

写真図版1	【新通遺跡】				
	調査地西側遠景（南東から）	調査地西側近景（北西から）	調査地東側近景（南東から）		
	6 トレンチ調査風景（南東から）	8 トレンチ調査風景（南東から）	13 トレンチ調査風景（南東から）		
	3 トレンチ土層断面（南東から）	4 トレンチ土層断面（南東から）			
写真図版2	【新通遺跡】				
	5 トレンチ土層断面（南東から）	7 トレンチ土層断面（北西から）	8 トレンチ土層断面（北西から）		
	9 トレンチ土層断面（北西から）	10 トレンチ土層断面（北西から）	11 トレンチ土層断面（南東から）		
	12 トレンチ土層断面（南東から）	13 トレンチ土層断面（北西から）			
写真図版3	【丸高遺跡】				
	調査地遠景（北東から）	調査地西側近景（南から）	調査地東側近景（西から）		
	1 トレンチ調査風景（北西から）	11 トレンチ調査風景（南から）	1 トレンチ土層断面（南東から）		
	1 トレンチ柱根検出状況（北西から）	5 トレンチ土層断面（南東から）			
写真図版4	【丸高遺跡】				
	7 トレンチ土層断面（南東から）	12 トレンチ土層断面（南東から）	出土遺物		
写真図版5	【館屋敷館跡・元狭口遺跡】				
	調査地近景（西から）	調査地近景（東から）	1 トレンチ調査風景（北西から）		
	2 トレンチ調査風景（南から）	1 トレンチ土層断面（東から）	1 トレンチ土層断面（北東から）		
	2 トレンチ土層断面（西から）	調査風景（北東から）			
写真図版6	【大塚遺跡】				
	調査地近景（東から）	調査地近景（北西から）	5 トレンチ調査風景（北西から）		
	6 トレンチ調査風景（北西から）	1 トレンチ土層断面（北から）	2 トレンチ土層断面（北から）		
	5 トレンチ土層断面（北から）	6 トレンチ土層断面（北から）			
写真図版7	【花立遺跡・舞台遺跡・釜淵遺跡】				
	花立遺跡 調査風景（北西から）	花立遺跡 調査風景（西から）	舞台遺跡 調査風景（南から）		
	舞台遺跡 調査風景（南から）	舞台遺跡 土層断面（南東から）	釜淵遺跡 調査風景（北から）		
	釜淵遺跡 調査風景（北から）	釜淵遺跡 土層断面（北西から）			
写真図版8	【宮寄土地内】				
	調査地遠景（南西から）	調査地遠景（南から）	調査地近景（南から）	調査地近景（南から）	
	調査風景（北から）	トレンチ土層断面（南東から）	トレンチ完掘（南から）		
	トレンチ深掘り土層断面（南東から）				
写真図版9	【中沢遺跡】				
	中沢遺跡周辺の空中写真	調査地近景（北西から）	調査地近景（南から）	調査地近景（北から）	
	調査地近景（南東から）				
写真図版10	【中沢遺跡】				
	1 トレンチ調査風景（南東から）	2 トレンチ調査風景（南東から）	1 トレンチ土層断面（南東から）		
	2 トレンチ土層断面（南西から）	出土遺物			

第 I 章 序 説

1 平成 24 年度事業の概要

加茂市ではこれまで 175 の遺跡が確認されている。その中で沖積地の遺跡については、平成 7 年の新潟県教育委員会主催で実施された詳細分布調査で多くが発見された。それから間もなくして、下条地区の沖積地にある遺跡を中心として大規模な開発の波にさらされた。平成 8 年頃から開始された国道 403 号線バイパス建設工事および吉津川地区泉宮ほ場整備事業に伴い発掘調査された丸渦遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡・太田遺跡などがある。だが、それらの整理作業と報告書刊行も平成 22 年度にはすべて終了し、その後は開発計画の沈静化とあわせ本発掘調査は行われていない。発掘調査で得られた考古資料は膨大であり、保存・管理・活用が大きな課題である。引き続き、小規模ではあるが市内全域で計画される開発行為を機敏に把握し、調整と適切な埋蔵文化財保護行政に精励する必要がある。

平成 24 年度の試掘・確認調査は、県事業および市事業については概ね、事前に計画が把握されていたものではあったが、予定していた道路事業に伴う確認調査で用地買収が進まず、部分的に実施する形になるなど円滑に調査が実施できないケースもあった。それに伴い予算管理においても変更を念頭に対応せざるを得なかった。また、民間開発や公共下水道工事など年度途中から急に対応を求められたものもある。試掘・確認調査は公共工事 6 事業、民間開発 3 事業に関係し、9 遺跡、1 地内を対象とした。

新通遺跡・丸渦遺跡・館屋敷館跡は県の道路建設事業、大塚遺跡は農業排水路改良工事、宮寄上地内・中沢遺跡は携帯電話無線基地局建設工事に伴う試掘・確認調査である。元狭口遺跡は市の道路建設事業、釜淵遺跡・花立遺跡・舞台遺跡は市の公共下水道工事に伴い確認（工事立会い）調査を実施した。館屋敷館跡と元狭口遺跡は以前から部分的に調査を継続しているものである。

上記の調査のほか、平成 24 年度には平成 23 年度加茂市内遺跡確認調査報告書を刊行した。また、緊急雇用創出事業に伴い加茂城跡の測量と一部確認調査を行った。

遺跡名・地区名	調査	調査原因	遺跡の主な時代	月 ※現地調査期間												備考		
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
新通遺跡	確認	道路建設	古墳		■													
丸渦遺跡	確認	道路建設	古墳		■													
館屋敷館跡	確認	道路建設	中世			■												
元狭口館跡	確認立会い	道路建設	中世											■			加茂市事業	
大塚遺跡	確認	排水路改良	古代											■				
花立遺跡	確認立会い	下水道工事	古代													■	加茂市事業	
舞台遺跡	確認立会い	下水道工事	中世				■										加茂市事業	
釜淵遺跡	確認立会い	下水道工事	古墳													■	加茂市事業	
宮寄上地内	試験	携帯電話無線基地局建設工事															■	
中沢遺跡	確認・確認立会い	下水道工事	古代														■	
加茂城跡	測量・確認	緊急雇用創出事業	中世														■	本書未収録

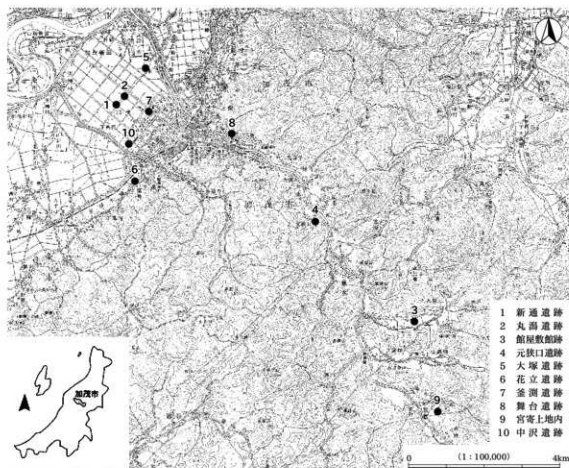
第 1 表 平成 24 年度発掘調査工程表

2 遺跡の位置と環境 (第1図)

加茂市は新潟県の県央域に位置し、中越地区に含まれる。地勢は東部に高さ1,000mを超える粟ヶ岳、権ノ神岳などの山岳が聳え、粟ヶ岳を源とする加茂川が大谷川、高柳川などの支流を集め、谷底平野を縦貫し、加茂新田地区で信濃川に注ぐ。流域延長は約11kmである。

加茂川上流部は「七谷」地区と呼ばれ、加茂川およびその支流が小規模な段丘を形成し、旧石器時代～縄文時代の遺跡が多く分布する。一方、弥生時代～古代の遺跡はほとんどなく、中世では小規模な山城や信仰関連遺物が多く確認される。加茂川が東山丘陵を抜けた市街地域には扇状地形が形成され、弥生時代後期後半頃に開発が開始される。沖積地では古墳時代前期に開発が進行し、その後若干の空白期間を挟んで、奈良・平安時代の遺跡が多く確認されている。

館屋敷館跡(3)と宮寄上地内(9)は加茂川上流域の山間地にある。宮寄上地内は段丘地形に立地する。元狭口遺跡(4)は加茂川中流域左岸の微高地に立地する中世の遺跡である。舞台遺跡(8)は加茂川右岸域で背後に丘陵がひかえた平野部に立地する。中沢遺跡(10)は下条川右岸域の沖積地に展開した大規模な集落遺跡である。新通遺跡(1)、丸瀧遺跡(2)、釜淵遺跡(7)は加茂川左岸域の沖積地に立地する。大塚遺跡(5)は加茂川左岸域の自然堤防上、花立遺跡(6)は東山丘陵縁部の緩傾斜地に立地する。



第1図 調査対象遺跡・地区位置図 (S=1:100,000)

(国土地理院 平成17年発行 [加茂]・平成9年発行 [新津] S=1:50,000 新図)

第Ⅱ章 道路建設工事関連

1 調査に至る経緯

3件の道路建設工事に伴い、4遺跡が試掘・確認調査の対象となった。

1件目は、国道403号三条北バイパスの横断地下道建設工事に伴う新通遺跡と丸湯遺跡の確認調査である。本件については、かなり以前から予定されていた工事で埋蔵文化財の取扱い協議についても幾度となく行われてきた。平成19年度から毎年度、確認調査経費が予算計上されてきたが、事業の用地買収が進まず、先送りになっていた。今回も丸湯遺跡地内の一部区域で用地買収が未了であったが、今後の事業計画の進捗への影響を少なくするために平成23年度末に用地買収が終了した区域を調査対象として、平成24年度早々に確認調査を実施することとした。また、年度途中の12月に一部区域で用地買収が終了したことから再び調査を実施した。

事務的な手続きは以下のとおりである。まず、平成24年4月9日付け三振地第6号・7号で埋蔵文化財発掘の通知が三条地域振興局長から市教委に提出された。それを受けて、市教委は平成24年4月12日付け民資第43号・44号で埋蔵文化財の発掘について、確認調査が必要との意見を付し、新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。その後、借地部分を含めた地権者への説明と調査への同意を得ながら、埋蔵文化財発掘調査の報告を平成24年5月17日付け民資第63号・64号および平成24年12月20日付け民資第224号で新潟県教育委員会教育長宛てに行い、調査の準備に入った。

2件目は、県道出戸村松線の改良（拡幅）工事に伴う館屋敷館跡である。本事業に対しては、平成23年度から用地買収などが整った区域を対象に確認調査を行ってきたが、平成24年度は同一路線の残区間を対象にしたものである。

事務的な手続きは以下のとおりである。まず、平成24年6月25日付け三振地第216号で埋蔵文化財発掘の通知が三条地域振興局長から市教委に提出された。それを受けて、市教委は平成24年6月25日付け民資第99号で埋蔵文化財の発掘について、確認調査が必要との意見を付し、新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。その後、埋蔵文化財発掘調査の報告を平成24年7月2日付け民資第104号で新潟県教育委員会教育長宛てに行い、調査の準備に入った。

3件目は、市道元狭口線の改良（拡幅）工事に伴う元狭口遺跡である。加茂市の事業で、平成22年度から同事業に伴う確認調査を行ってきた。平成24年度も区域が延伸する工事であったが、現況や工事内容を考慮し、立会い調査とすることとした。

事務的な手続きは以下のとおりである。まず、平成24年10月3日付け建第1144号で埋蔵文化財発掘の通知が加茂市長から市教委に提出された。それを受けて、市教委は平成24年10月5日付け民資第179号で埋蔵文化財の発掘について、工事立会い調査が必要との意見を付し、新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

2 新通遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要 (第2・3図)

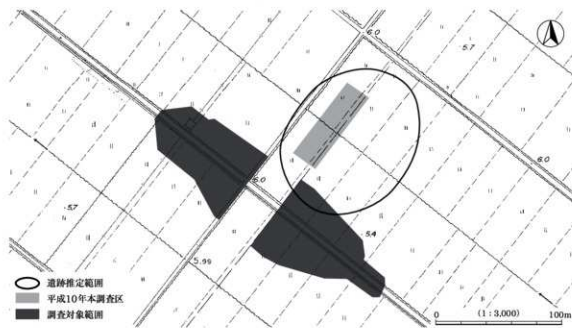
新通遺跡は沖積地に立地し、標高約5.7mの水田面から約1.5m下で確認された〔伊藤1997・1998〕。遺跡は平成7年の分布調査で発見され、平成8・9年の確認調査を経て、平成10年に国道403号線バイパス工事に伴い約1,500m²が発掘調査された。調査区からは柵列1条、自然河道1条と水量調整を行ったと見られる矢板が打ち込まれた溝1条、土坑5基、ピット63基が検出された。遺跡からは弥生時代中期、古代の土器が少量出土したが、古墳時代前期後半を主体とする〔伊藤・平岡ら2000〕。

今回の確認調査の対象地は、本調査区域から近いところで東へ約30m、西へ約50mである。確認調査は平成24年5月21日～23日に行った。用地買収済み区域および借地部分を対象とした。重機により約2.0m×3.5mのトレンチを掘削し、遺構、遺物の検出および土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋め戻しを行った。借地部分にかかるところについては、後に再び耕作が行われることから川砂を入れた。調査は合計で13トレンチ、約78.5m²である。

(2) 層序 (第4図)

各トレンチでほぼ同様の土層堆積状況が確認された。基本的にはⅠ層水田耕作土、Ⅱ層床土、Ⅲ層暗黒色粘質土、Ⅳ層黒色腐植物層、Ⅴ層暗灰色腐植物層(主に4・5トレンチ)、Ⅵ層灰色砂層、Ⅶ層茶色・黒色腐植物層、Ⅷ層暗灰色粘質土、Ⅸ層緑灰色粘質土である。本調査区域の西側にある1～7トレンチにおいては、Ⅵ・Ⅶ層が2m以上と厚く堆積し、1～4・7トレンチにおいてははいわゆる地山面が確認できていない。地形的に低い場所であったことが推測できる。本調査区域から東側区域にあたる8～13トレンチにおいてはⅥ・Ⅶ層の堆積がやや薄くなり、現地表面下約2.1～2.3mで古墳時代前期の遺物包含層に相当すると考えられるⅧ層が確認される。Ⅸ層が遺構確認面である。

なお、平成10年の本調査の際、今回報告のⅧ層に対比される基本土層Ⅴ層に含まれる木材の放射性炭素年代測定を実施したところ、 $1,450 \pm 50\text{yr.B.P}$ で紀元後500年(同位体補正済)の古墳時代の年代



第2図 新通遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:3,000)

(加茂市 平成4年印刷〔加茂市街図その7〕・平成17年印刷〔加茂市街図その11〕 S=1:2,500 原図)

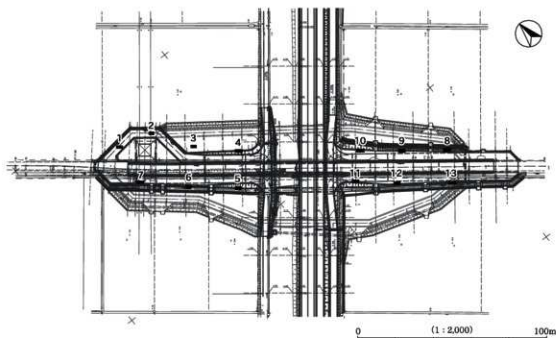
が得られている〔伊藤・平岡ほか2000〕。

(3) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できなかった。

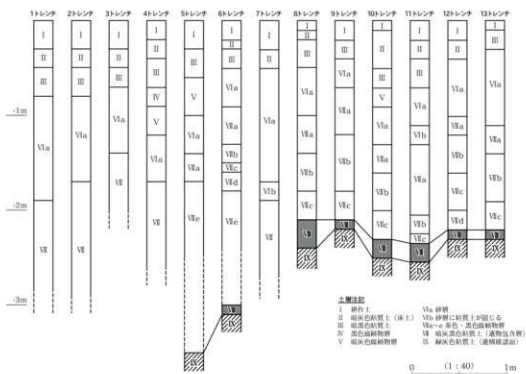
(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認できなかった。



第3図 新通遺跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:2,000)

(三東地域圏興局提供平面図 S=1:500 拡大)



第4図 新通遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

3 丸潟遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要 (第5・6図)

丸潟遺跡は沖積地に立地し、標高約5.4mの水田面から約1.0m下で確認された〔伊藤1997・1998〕。遺跡は平成7年の分布調査で発見され、平成8・9年の確認調査を経て、平成10年に国道403号線バイパス工事に伴い約2,550m²が発掘調査された。新通遺跡とは約200mの距離にある。調査区からは柵列



第5図 丸潟遺跡推定範囲と調査対象地位位置図 (S=1:3,000)

(加茂市 平成4年印刷 加茂市街図その7) S=1:2,500 原図)

1条、溝4条、土坑7基、ピット2基が検出された。自然河道の可能性が高い1号溝から多量の古墳時代前期後半の土器と木製品が出土している〔伊藤・平岡ほか2000〕。平成17年には本調査区から北へ約150mの地点で排水路改良工事に伴う工事立会い調査が行われ、古墳時代前期後半の土器が出土している〔伊藤2008〕。

今回の確認調査の対象地は、本調査区域から南へ約100mである。確認調査は用地買収の進捗状況から平成24年5月23日～24日と12月27日の2回に分割して行った。残りの区画は平成25年度に実施する。重機により約2.0m×3.5mのトレンチを掘削し、遺構、遺物の検出および土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点庄しながら埋め戻しを行った。借地部分にかかるところについては、後に再び耕作が行われることから川砂を入れた。調査は1回目が8トレンチ、約53.2m²で2回目が4トレンチ、約21m²で、合計は12トレンチ、約74.2m²である。トレンチ番号は1回目からの連番としている。

(2) 層 序 (第7図)

各トレンチでほぼ同様の土層堆積状況が確認された。基本的には1層水田耕作土、II層床土、III層暗黒色粘質土、IV層茶色・黒色腐植物層、V層暗灰黒色粘質土、VI層暗茶色腐植物層(主に6～8トレンチ)、VII層緑灰色粘質土である。新通遺跡に比べ、砂層や腐植物層の堆積が少なく、地形がやや安定した地点であったことが推測される。V層が古墳時代前期の遺物包含層、VII層が遺構確認面に相当すると考えられる。

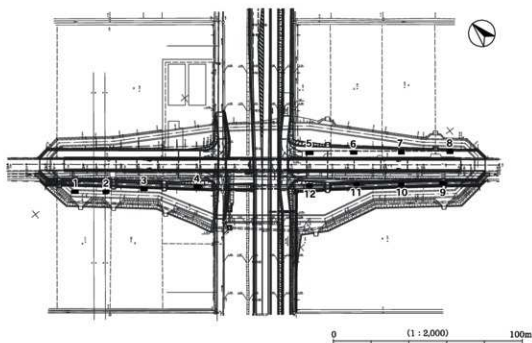
(3) 遺構と遺物 (第8・9図)

1トレンチから柱列が1条確認された。2と3の二つの柱根が約1.8m間隔で北西～南東方向に並ぶ。柱2・3は木の形状や規模がほぼ同じである。柱2の北側でほかと形状の異なる柱1が出土した。柱1～3ともに掘り方が不明で、打ち込み式の可能性が高い。柱はIV層下部にて頭を出し、VII層に深く埋め込まれていた。なお、周辺から土器が全く出土せず、遺構の時期は不明である。ただし、後述(第VI章)するように1と3に対し放射性炭素年代測定を行った結果からは、古墳時代中期～飛鳥時代頃の遺構である可能性がある。

1は円柱で芯持ち丸太を利用している。下端は工具による加工が施され、尖る。樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節である。2・3は角柱でミカン割り材を利用している。下端は片側上がりの平坦である。3の下端部には加工痕が顕著に見られる。樹種はいずれもクリである。1と2・3では柱の形状、樹種、年代測定結果が異なることから一連の遺構ではないことが推測される。

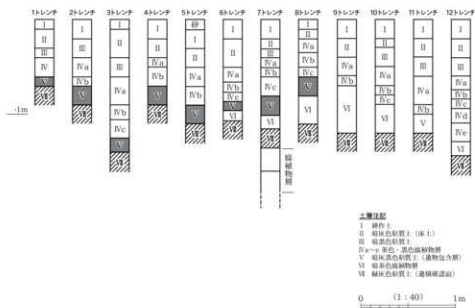
(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、1トレンチ以外で遺構・遺物は確認できなかった。時期不明の柱列のみ検出され、遺跡の内容については多くを言及できないが、自然科学分析の年代測定から平成10年の本調査区で確認された遺跡に後続した年代が示された。この状況から、1トレンチ周辺は特に慎重工事の上、立会い調査が必要と判断される。ほかの地点においても水田面から約60cm下に古墳時代頃の遺物包含層相当層が存在することから掘削工事が行われる場所については工事立会い調査を行うことが必要である。

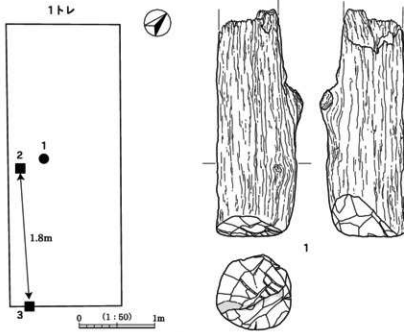


第6図 丸沼遺跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:2,000)

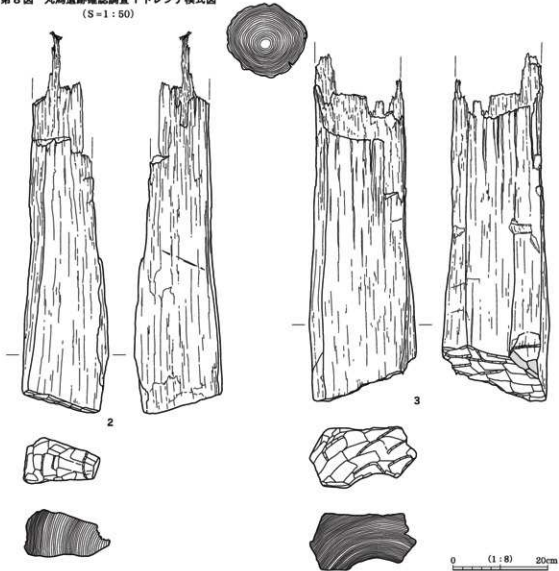
(三島地城館提供平面図 S=1:500 縮図)



第7図 丸沼遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)



第8図 丸海遺跡確認調査1トレンチ模式図
(S=1:50)



第9図 丸海遺跡出土遺物

4 館屋敷館跡

(1) 遺跡と確認調査の概要 (第10・11図、第2表)

館屋敷館跡は加茂市南東部の山間地にあり、丘陵部から緩やかに南側に向かい舌状に伸びる台地(標高約76m)と大谷川右岸の平地(標高約73m)にかけて存在するものと推測されている。推定範囲内には「町屋敷」や「番場田」などの地名や細長い短冊状の地割りが地籍図に残るなど中世城下町の様相を示すと指摘されている〔高橋1997〕。本館跡に関連した山城跡は石山城跡で、地籍図には堀を示す区画が存在するとされる(鴨海忠夫氏の教示)。遺跡は平成7年の詳細分布調査により発見された。これまでに、第2表のとおり、県営中山間地域農村活性化総合整備事業や道路建設、民間開発に伴い確認調査が実施されてきた〔伊藤1999・2000・2011b、伊藤・立木2012〕。なお、平成25年にこれまでたて屋敷遺跡としていた遺跡名を館屋敷館跡へと改称した。

調査年次	調査原因	調査面積(m ²)	確認坑数	備考	文献
平成10年(1998)4.7~4.11	県営中山間地域農村活性化総合整備事業	176	20		伊藤1999
平成11年(1999)4.5~4.9	県営中山間地域農村活性化総合整備事業	100	27		伊藤2000
平成23年(2011)1.25~1.26	道路建設	33	8		伊藤2011b
平成23年(2011)5.26	携帯電話用鉄塔建設	4	1	周辺地の試掘調査	伊藤・立木2012
平成24年(2012)7.11	道路建設	13	2		本書

第2表 館屋敷館跡確認調査履歴一覧



第10図 館屋敷館跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:3,000)

(三栄地域振興局提供平面図 S=1:2,000 原図)

今回の確認調査は、昨年度に引き続くもので用地買収待ちであった延長約50mの区間を対象とした。調査は平成24年7月11日に行った。重機により約2.0m×3.0mのトレンチを掘削し、遺構、遺物の検出および土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋めの戻しを行った。調査は2トレンチ、約12.9m²である。

(2) 層 序 (第12図)

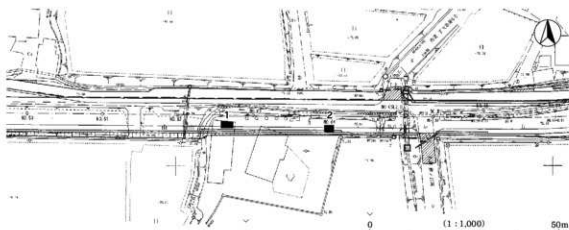
1・2トレンチとも基本的に同様の土層堆積である。I層表土、II層黄橙色土、III層暗灰色土、V層黄白色粘質土である。V層はしまりが強く、地山と判断した。IV層は2トレンチで確認された溝の覆土で、暗灰色土である。

(3) 遺構と遺物

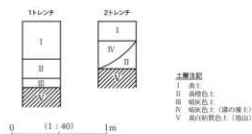
2トレンチで溝を確認したが、I層表土下の浅いところからの掘り込みであることや出土遺物もないことから中世以前の遺構と判断できなかった。

(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認できなかった。



第11図 館屋敷館跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:1,000)
(三栄地域振興局提供平面図 S=1:500 原図)



第12図 館屋敷館跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

5 元狭口遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要 (第13・14図)

元狭口遺跡は加茂川中流域の加茂市狭口地内にある。加茂川左岸で丘陵裾部に立地する。現況は標高約37mの水田である。各水田面には約80cm程の段差があり、削平や改変が行われた可能性がある。遺跡は平成7年の詳細分布調査で発見された。周辺には大門上遺跡(8)、金泉寺墓地の板碑(9)など中世の遺跡がいくつか確認されている。

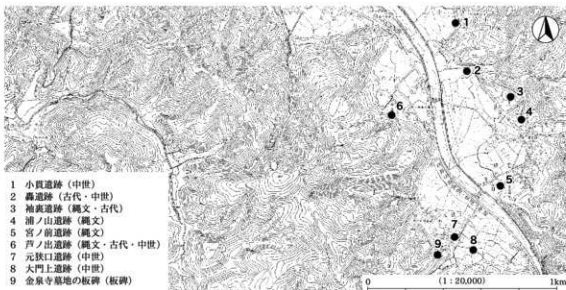
本事業に伴う確認調査は、平成22年度から工事の進捗にあわせて開始された。平成22年度は延長70mの範囲を対象とし、3トレンチ、約8m²の調査を実施している〔伊藤2011b〕。平成23年度は延長6mの範囲を対象とし、1トレンチ、約2m²の調査を実施している〔伊藤・立木2012〕。いずれの調査でも遺構、遺物は確認されていない。今回はこれまでの調査結果や工事内容を考慮し、掘削工事の際に立会い調査を実施することとした。

(2) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できなかった。

(3) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認できなかった。



第13図 元狭口遺跡と周辺の遺跡位置図 (S=1:20,000)

(加茂市 平成20年印刷 加茂市街図) S=1:10,000 原図



第14図 既往の確認調査と調査対象地位置図 (S=1:1,000)

(加茂市提供平面図 S=1:250 原図)

第三章 農業基盤整備事業関連

1 調査に至る経緯

農業基盤整備事業に関連し、1 遺跡に対して確認調査を行った。事業は加茂郷土地改良区が主体で、計画区域について5月下旬に把握し、協議を開始した。

事業は、大塚遺跡・丸瀨遺跡・中沢遺跡・鬼倉遺跡地内において計画された。大塚遺跡では、現況土水路を重機で再掘削し、コンクリート2次製品の排水フリューム（500×400または600×600）を設置する工事、丸瀨遺跡では柵杭および柵板の設置工事、中沢遺跡・鬼倉遺跡では現況柵梁の排水路を床掘りし底打ちコンクリートを行う工事内容である。

文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出については、平成24年9月5日付けで大塚遺跡に対し加土改第110号・111号、丸瀨遺跡に対し加土改第112号、中沢遺跡に対し加土改第113号、鬼倉遺跡に対し加土改第114号で加茂郷土地改良区理事長から新潟県教育委員会教育長宛てに出された。これを受けて市教委ではそれぞれ、現況と工事内容を考慮しながら、対応を判断した。その結果、第111号で届出の延長約280mの現況土水路部分に排水フリューム（600×600）を設置する工事部分については掘削幅が約2mあることから確認調査が必要とし、ほかはすべて工事立会い調査とすることとした。埋蔵文化財の発掘については平成24年9月6日付け民資第150号～154号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。その後、関係者と調整を行い調査の準備に入ったが、建設業者が水害復旧工事で手一杯なことから日程調整が難しい状況にあった。なるべく降雪時期を避けたかったが、調査は12月にずれ込んだ。文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告について、平成24年12月17日付け民資第223号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出し、再度調査の準備に入った。

以下、大塚遺跡の確認調査を実施した結果について記す。

2 大塚遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要（第15・16図）

大塚遺跡は加茂川左岸の自然堤防上一帯に展開する古代の遺跡である。ほぼ南北方向に延びる自然堤防上約1.1kmの範囲で遺物が採集される。平成7年の詳細分布調査により遺跡登録された。平成10年に雨水排水ポンプ場建設工事に伴い確認調査が行われ、10世紀前半頃の遺構、墨書土器を含む土師器が確認されている〔伊藤1999〕。また、採集資料ではあるが古墳時代後期の土師器も見られる〔伊藤2003〕。

調査対象地は遺跡推定範囲の北端部に近い、現地表面の標高は約6mである。確認調査は、平成24年12月25日に行われた。工事計画予定地内を対象として任意の坑を設定し、重機により約2.0×2.7mのトレンチを6か所掘削し、遺構、遺物の検出および層序の確認を実施した。掘削の深度については、排水路改良工事の最深部を超えない程度としたが、部分的にそれ以上に掘り下げて、調査を行った。工事予定掘削深度を超えたトレンチについては、川砂を入れて転圧しながら埋め戻しを行った。調査面積は約32m²である。

2 大塚道跡

(2) 層 序 (第17図)

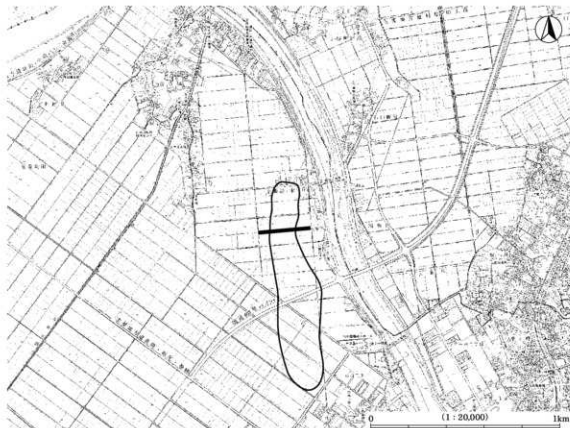
基本土層は、I層が水田の畦畔、II層が耕作土、III層が暗灰茶色粘質土でこれより下層は地点により異なるが、IV層が暗茶色腐植物層、V層が暗黒色土、VI層が灰色腐植物層、VII層が灰色砂質土の堆積が認められる。調査では概ね現地表面から約1.2～1.5m下まで掘削したが、遺構確認面は把握できなかった。5・6トレンチで認められたV層が古代の遺物包含層である可能性もあるが、遺物が出土しないため断定はできない。

(3) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できない。

(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認できなかった。しかし、古代の遺物包含層と推測される土層が認められることから、近接するところに遺構・遺物が確認される可能性がある。

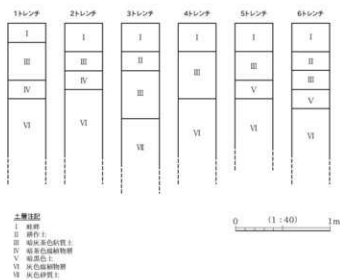


第15図 大塚道跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:20,000)
(加茂市 平成20年印刷 [加茂市街図] S=1:10,000 原図)



第16図 大塚遺跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:4,000)

(加茂市 平成4年印刷(加茂市街図その7)・平成11年印刷(加茂市街図その8) S=1:2,500 原図)



第17図 大塚遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

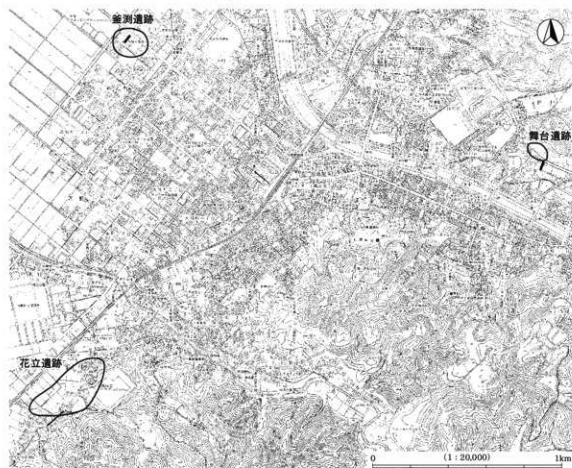
第IV章 公共下水道工事関連

1 調査に至る経緯

公共下水道工事に関係し、花立遺跡、舞台遺跡、釜淵遺跡の3遺跡に対し工事立会い調査を行った。公共下水道工事については、加茂市下水道課が遺跡分布図と工事予定地を照合し、周知の遺跡地内での工事であれば、協議を行うことにしている。ほとんどが掘削幅1m未満であるため、工事立会い調査または慎重工事の取り扱いになる。

花立遺跡地内の工事については、昨年度工事の延長部分である。文化財保護法第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知については、平成24年7月18日付け下第106号で新潟県教育委員会教育長宛てに出された。埋蔵文化財の発掘については、平成24年7月20日付け民資第121号で、工事立会いの意見を付して新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

舞台遺跡地内の工事については、文化財保護法第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知について、平成24年6月5日付け下第87号で新潟県教育委員会教育長宛てに出された。埋蔵文化財の発掘について、平成24年6月7日付け民資第80号で、工事立会いの意見を付して新潟県教育委員会教育長



第18図 遺跡推定範囲と調査対象地位位置図 (S=1:20,000)

(加茂市 平成20年印刷 [加茂市B版] S=1:10,000 原図)

宛てに提出した。

釜淵遺跡地内の工事については、文化財保護法第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知について、平成24年8月31日付け下第125号で新潟県教育委員会教育長宛てに出された。埋蔵文化財の発掘について、平成24年9月4日付け民資第143号で、工事立会いの意見を付して新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

2 花立遺跡

(1) 遺跡と立会い調査の概要 (第18図)

花立遺跡は畑地などから土器が採取され、平成5年に遺跡登録された。平成7年に行われた詳細分布調査でも縄文土器、須恵器、土師器、珠洲焼などが採取され、縄文～中世の遺跡として把握された。遺跡は新津丘陵縁辺の標高約13mの微高地上に立地する。後背の丘陵上には福島古墳群が確認されている。

今回の調査対象地は昨年度の立会い調査で須恵器臺が出土した③区域からの南西方向への延長区間である〔伊藤・立木2012〕。調査は掘削工事に合わせ、10月中旬に数日立会い、遺構、遺物の確認を行った。既に攪乱されたところが多く、遺構、遺物ともに確認できなかった。

(2) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できない。

(3) 調査のまとめ

今回の調査対象区域では既に攪乱されたところが多く、遺構、遺物ともに確認できなかった。

3 舞台遺跡

(1) 遺跡と立会い調査の概要 (第18図)

舞台遺跡は加茂川右岸の標高約16mの沖積地に立地する。従来、後背地に存在する上条前山城跡との関連から「上条館跡」の推定地となっていたが、平成6年の確認調査により、舞台遺跡と改称された。平成8年には約1,000m²の発掘調査が行われ、井戸や河川跡が確認され、13世紀代の中世土師器や珠洲焼、木製品などが出土した。

調査対象地点は、遺跡推定範囲の南側で、発掘調査地点と近接している。調査は掘削工事に合わせ、7月下旬～8月上旬まで断続的に数日立会い、遺構、遺物の確認を行った。

(2) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できない。

(3) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、既に攪乱されたところが多く、遺跡は確認できなかった。

4 釜淵遺跡

(1) 遺跡と立会い調査の概要 (第18・19図)

釜淵遺跡は加茂川左岸の沖積地に立地する。遺跡は加茂市役所の南側にある。平成6年に民間開発事業に伴い、上・下層あわせて約3,150m²の発掘調査が行われ、上層では古墳時代後期～中世、下層では古墳時代前期の遺跡が調査されている。土器集積遺構を中心とする。

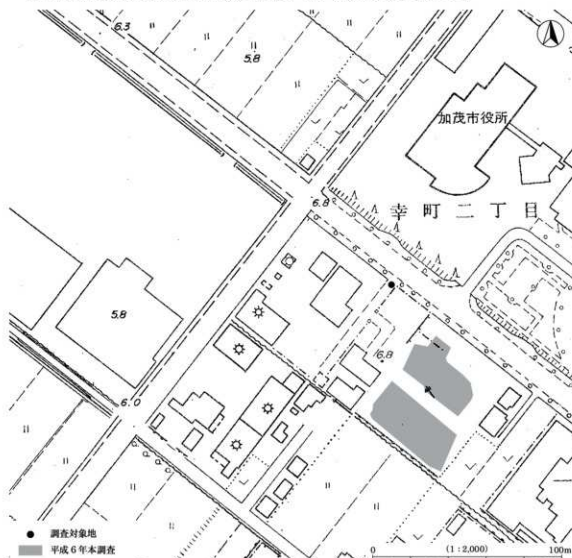
調査対象地点は、本発掘調査地点と近接する。調査は掘削工事に合わせ、10月10日に立会い、遺構、遺物の確認を行った。

(2) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できない。

(3) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認できなかった。



第19図 釜淵遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:2,000)

(加茂市：平成17年印刷版「加茂市地図その11」 S=1:2,500 原図)

第V章 民間開発関連

1 調査に至る経緯

携帯電話無線基地局建設工事に係り、宮寄上地内で試掘調査と中沢遺跡で確認調査を行った。

宮寄上地内での携帯電話無線基地局建設工事は平成24年6月末に事業者から開発の計画と埋蔵文化財の有無についての照会を受けた。周知遺跡は存在しなかったが、段丘上にあることなどの立地環境を考慮し、試掘調査を行うことで協議を進めた。その後、事業者および地権者の了解を得た後、調査の準備に入った。文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告について、平成24年8月22日付け民資第136号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

中沢遺跡地内での携帯電話無線基地局建設工事は平成24年7月末に事業者から開発の計画と埋蔵文化財の有無についての照会を受けた。計画地は中沢遺跡推定範囲のほぼ中央部で、確認調査が必要なことを事業者に伝え協議を進めた。その後、事業者から平成24年9月14日付けで「埋蔵文化財の事前調査（試掘・確認調査）について」の依頼文が市教委に出された。また、同日付けで文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出も提出された。これを受け、市教委は平成24年9月18日付け民資第164号で確認調査が必要という意見を付し、埋蔵文化財の発掘について新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。その後、調査の準備に入り、文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告について、平成24年9月20日付け民資第168号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

2 宮寄上地内

(1) 調査対象地と試掘調査の概要（第20・21図）

調査対象地は加茂川上流部の大字宮寄上字岩野地内にある。加茂川右岸の段丘上で標高約105mである。加茂川とその支流小乙川が合流する地点に立地する。現状は荒地であるが、かつては畑地であった。

周辺には諏訪神社前遺跡(7)、小乙の宝篋印塔(8)、宝生院跡(6)などがあり、主に中世以降の遺跡が周知されている。また、加茂川を挟んで約400mの距離にある対岸の段丘上には旧石器時代～縄文時代の牛ヶ沢B遺跡(2)〔伊藤1993〕が立地する。牛ヶ沢B遺跡は調査対象地よりも一段高い段丘上であり、標高は約120mである。

試掘調査は、平成24年8月29日に行った。鉄塔の基礎工事が行われる範囲を対象に、重機により約4.0m×3.7mのトレンチを掘削し、遺構、遺物の検出および土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに埋め戻しを行った。調査は約14.8㎡である。

(2) 層 序（第22図）

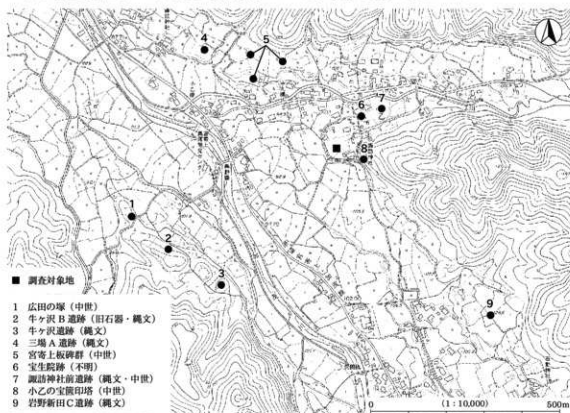
I層表土が約20cm程堆積し、すぐにII層黄色礫層の基盤層となる。遺物包含層および遺構確認面は確認できなかった。

(3) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できなかった。

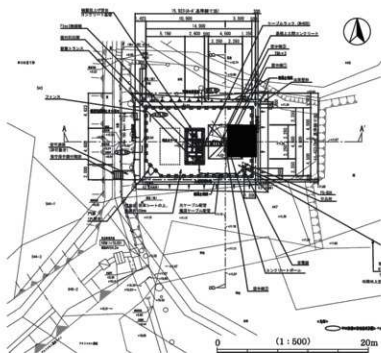
(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認できなかった。



第 20 図 宮寄上地内試掘対象地と周辺の遺跡位置図 (S=1:10,000)

(加茂市 平成元年印刷 [加茂市東部地形図 2] S=1:10,000 原図)



第 21 図 宮寄上地内試掘調査トレンチ位置図 (S=1:500)

(ソフトバンク提供平面図 S=1:250 原図)



第 22 図 宮寄上地内試掘調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

3 中沢遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要 (第23～25図)

中沢遺跡は加茂市の南西部で、下条地区の芝野地内にある。遺跡は下条川右岸の扇状地形の先端部付近から沖積地にかけて展開する。推定面積は約27万m²である。

遺跡は平成7年の詳細分布調査により発見・登録され、平成8年以降たびたび開発の波にさらされ、確認調査や本調査が実施されている〔伊藤1998・2000・2005b・2008・2011b、伊藤・立木2012〕。その結果、遺跡の中心部では現地表面下約2mに弥生時代後期の集落跡とそこから約1m程の間層を挟んで上層に官衙関連の可能性のある古代の集落が確認された。ほかに古墳時代前期、中世、近世の遺構、遺物が出土している。

確認調査は平成24年9月26日に行った。工事計画予定地内の中で、鉄塔基礎工事範囲(約2×2m)を対象として任意の調査坑を設定した。重機により約2.0×3.5mのトレンチを掘削し、遺構、遺物の検出および土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに埋め戻しを行った。調査は2トレンチ、約14.5m²である。その後、平成25年3月25日に工事計画地内にある暗渠管の移設工事に伴い、掘削時に立会い調査を実施した。

(2) 層 序 (第26図)

現地表面から2.4m程掘り下げた。基本土層はI層水田耕作土、II層暗褐色土、III層暗灰黒色土、IV層緑灰色粘質土、V層緑灰色砂質土、VI層黒色腐植物層、VII層灰色粘質土、VIII層暗灰黒色土、IX層灰色粘質土が堆積する。VII～IX層は黒色土と灰色土が互層を呈する。III層から平安時代の土器が出土し、遺物包含層と見られる。IV層が古代の遺構確認面である。

(3) 遺構と遺物 (第27図)

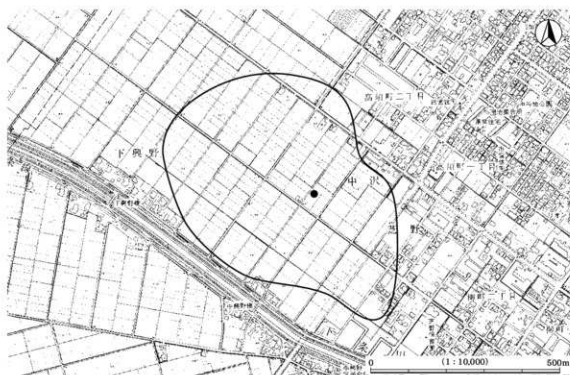
遺構は確認できなかった。遺物は確認調査で須恵器1点、土師器15点が出土した。工事立会い調査では須恵器5点、土師器22点、木製品2点が出土した。

1・2は須恵器で、1が横瓶、2が甕である。3～5は土師器無台碗である。いずれも口縁端部が外反する。口径は10.0～12.0cmと小ぶりである。6・7は土師器長甕である。6の口縁端部はやや上方に摘み上げられる。

小ぶりの土師器無台碗や長甕の口縁部の形態や須恵器食膳具が見られないことから、春日編年VI～VII期〔春日1999〕で、概ね10世紀前半頃のものと同推測される。

(4) 調査のまとめ

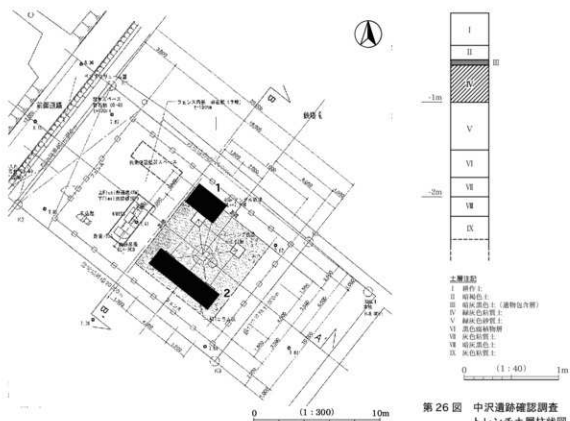
今回の調査対象区域では現地表面下約50～60cmに古代の遺物包含層であるIII層が存在し、平安時代の遺物が散発的に出土した。しかし、明確な遺構は確認できず、本調査を実施するまでには至らない。今後も、鉄塔の本体工事においては慎重な掘削工事のもと、工事立会いを行い、遺物を探取し、遺構が検出された場合には必要な記録をとることが求められる。



第 23 図 中沢遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:10,000)
 (加茂市 平成 20 年印刷 加茂市街図) S=1:10,000 原図



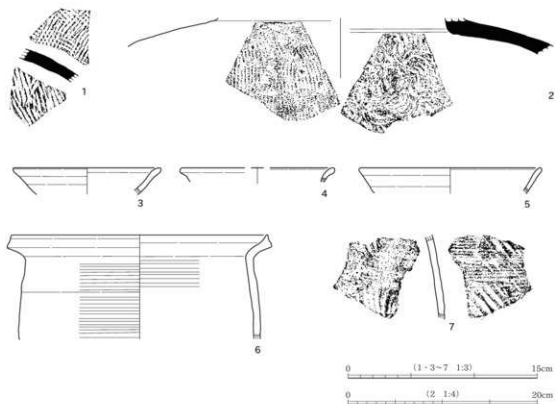
第 24 図 中沢遺跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:2,000)
 (加茂市 平成 17 年印刷 加茂市街図その 11) S=1:2,500 原図



第25図 中沢遺跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:300)

(ソフトバンク提供平面図 S=1:250 原図)

第26図 中沢遺跡確認調査
トレンチ土層柱状図
(S=1:40)



第27図 中沢遺跡出土遺物

第VI章 丸瀉遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

丸瀉遺跡は、信濃川と後背の東山丘陵から流下する加茂川が形成した扇状地との間に分布する沖積地に立地する。本遺跡では、過去に発掘調査が実施されており、古墳時代の建物跡や木製品が多量廃棄された河道跡などが確認されている。今回の確認調査は、計8か所のトレンチについて調査が実施され、古墳時代あるいは古代と考えられる柱根が確認されている。

本報告では、上記したトレンチより出土した柱根の年代および樹種の検討を目的として、放射性炭素年代測定、樹種同定を実施した。

2 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、1トレンチから出土した柱根3点(第9回1~3)より選択された1・3の2点である。柱根試料は、2・3が約1.8m間隔で位置し、1は2の北側に隣接して確認されている。また、柱根試料の断面形状は、1が円(丸)材状、2・3が角材状を呈する。

今回の測定に供した試料は、担当者により採取された木片であり、後述する樹種同定と重複するものは試料を分割した残りを対象としている。

(2) 分析方法

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラフアイトを生成する。化学処理後のグラフアイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma: 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	校正年代 (暦年校正用) (yrBP)	暦年校正結果			相対比	測定機器 CodeNo.
				σ	cal AD	cal BP		
1 トレンチ 1 (柱根)	1,350 \pm 20	-25.19 \pm 0.42	1,353 \pm 24	σ	cal AD 652 - cal AD 671	cal BP 1,298 - 1,279	1.000	IAAA - 130108
				2σ	cal AD 641 - cal AD 690	cal BP 1,309 - 1,260	0.980	
				2σ	cal AD 752 - cal AD 761	cal BP 1,198 - 1,189	0.020	
1 トレンチ 3 (柱根)	1,540 \pm 30	-26.31 \pm 0.32	1,537 \pm 25	σ	cal AD 440 - cal AD 485	cal BP 1,510 - 1,465	0.476	IAAA - 130109
				2σ	cal AD 532 - cal AD 567	cal BP 1,418 - 1,383	0.524	
				2σ	cal AD 432 - cal AD 584	cal BP 1,518 - 1,366	0.995	
					cal AD 589 - cal AD 590	cal BP 1,361 - 1,360	0.005	

第3表 放射性炭素年代測定および暦年校正結果

PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5,730 \pm 40 年) を校正することである。暦年校正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年校正プログラムや暦年校正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。

暦年校正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が 68%、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 結果

柱根より採取された木片の同位体効果による補正を行った測定結果 (補正年代) は、1 が 1,350 \pm 20yrBP、3 が 1,540 \pm 30yrBP を示す。また、暦年校正結果 (測定誤差 σ) は、1 が calAD 652-calAD 671、3 が calAD 440-calAD 567 である (第3表)。

トレンチより出土した柱根は、1 が 7 世紀中頃から後半、3 が 5 世紀中頃から 6 世紀中頃という暦年範囲を示すことから、古墳時代～古代前半頃の資料と推定される。なお、柱根 2 試料に認められた時期差については、柱根の形状の違いによる年輪の残存状況を反映している可能性や属する遺構が異なることを示している可能性があり、木取り (加工方法) の確認や今後の発掘調査成果などによる評価が望まれる。

3 樹種同定

(1) 試料

試料は、1 トレンチより出土した柱根 3 点 (第 9 図 1～3) である。試料の詳細は結果とともに第 4 表に示す。

(2) 分析方法

各木片から剃刀を用いて木口 (横断面)・柀目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール (抱水クロラール、アラビアゴム粉末、

グリセリン、蒸留水の混合液) で封入し、プレバートとする。プレバートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、[島地・伊東 1982] や [Wheeler ほか 1998] を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、[林 1991] や [伊東 1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

試料名	種類	形状	法量 (cm)		樹種 (分類群)
			長さ	径	
1 トレンチ	1	柱根 円 (丸) 材	48	18	コナラ属 コナラ亜属 コナラ節*
1 トレンチ	2	柱根 角材	81	19	クリ
1 トレンチ	3	柱根 角材	74	23	クリ*

*放射性炭素年代測定試料

第4表 樹種同定結果

(3) 結 果

同定結果を第4表に示す。柱根は、広葉樹2分類群(コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ)に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴などを記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

(4) 考 察

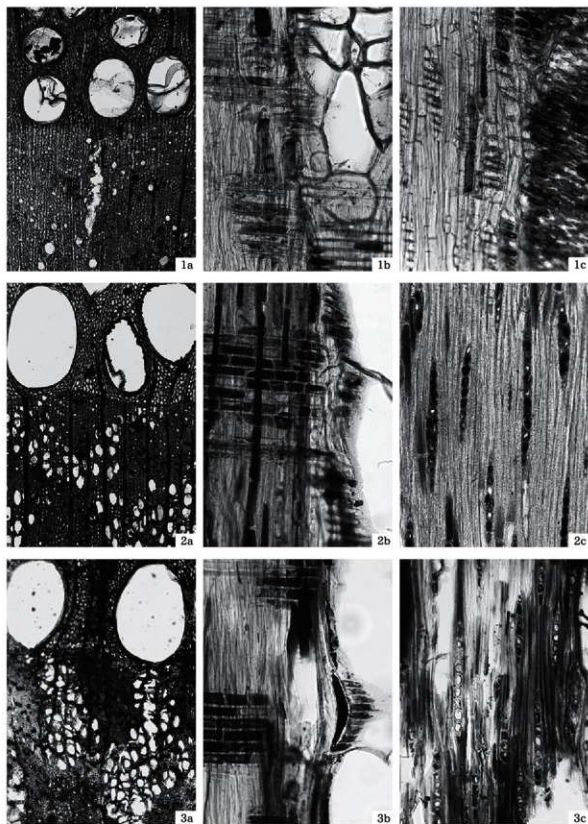
1トレンチから出土した柱根3点には、広葉樹のコナラ節とクリの2種類が確認された。コナラ節やクリは、いずれも二次林などを構成する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高く、とくにクリは耐朽性も高い。

調査所見によれば、柱根3点は柱列を構成する資料とされる。確認された樹種は、1がコナラ節、2・3がクリであることから、硬く強度の高い木材の利用が窺える。また、丸材状を呈する1がコナラ節、角材状の2・3がクリであったことから、形状(加工方法)により樹種が異なるという傾向も窺える。

丸函遺跡では、上述したように古墳時代の柵列などが確認されており、柱材(柱根)を含む木製品を対象とした樹種同定が実施されている。柵列に伴う柱根や丸木、杭とされる試料についてみると、オニグルミ、ヤマウルシ、ケンボナンシ属、トネリコ属およびガマズミ属が確認されている[バリノ・サーヴェイ株式会社2000]。また、新潟県内の古墳時代における柱材についてまとめた春日によれば、竪穴建物にクリが多く利用される一方、掘立柱建物や打込柱建物にはクリがあまり利用されず、トネリコ属、ヤマグワ、ヤナギ属、エゴノキ属などが利用される傾向が指摘されている[春日2008]。これらの事例を参考とすると、1トレンチより出土した柱根は、柵列に伴う樹種構成とは異なることや建物等に伴う柱材の木材選択の傾向に似ることが指摘できるが、この点については今後の発掘調査結果による検討が望まれる。

引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材』顕微鏡写真集 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 P81-181。
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 P66-176。
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 P83-201。
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 P30-166。
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 P47-216。
- 春日真実 2008 「越後における古墳時代～中世の柱材について」『新潟考古』19 新潟県考古学会 P43-74。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2000 「丸函遺跡から出土した木材の樹種」『丸函遺跡・新通遺跡 一国道403号線道路改良工事に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書一』加茂市教育委員会・山武考古学研究所 P154-170。
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 P176。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 P122. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*]



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (1)

2. クリ (2)

3. クリ (3)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

100 μ m: a

100 μ m: b, c

第28図 木材

第七章 ま と め

1 平成 24 年度調査成果について

本書に収録した試掘・確認調査および工事立会い調査は、9 遺跡および 1 地内を対象とした。

新通遺跡では既往の調査で把握されていた古墳時代の遺物包含層および遺構確認面に相当する土層の確認はできたが、遺物が出土せず調査対象地は遺跡の縁辺部と考えられる。丸瀧遺跡も同様の状況であったが、柱根 3 点が出土し、年代測定の分析結果から古墳～飛鳥時代の年代が示された。加茂市内では飛鳥時代の遺跡は未確認であり、土器などの遺物の出土が期待される。

館屋敷館跡ではこれまで数次の確認調査が実施されてきており、今回が道路改良工事に伴う最後の調査であったことから、今後これ以上の考古学的情報の上積みは難しい。遺跡の実態はなお不明な点が多い。元狭口遺跡も同様である。

大塚遺跡では遺構、遺物は確認されていないが、古代の包含層に対比される土層が堆積していることを確認できた。花立遺跡・舞台遺跡・釜淵遺跡は工事立会い調査で、すでに擾乱された場所であることや掘削深度が浅いことから遺跡は確認できなかった。

宮守上地内の調査対象地は立地環境から縄文時代頃の遺跡の存在も予想されたが、表土直下が礫層となり、遺跡は確認できなかった。

中沢遺跡では遺構は確認できなかったが、10 世紀前半頃の土器が出土した。中沢遺跡における古代の土地利用の痕跡として貴重な成果が得られた。

本書で報告した調査成果は断片的で情報量の少ないものであるが、個々の結果を積み重ねることによって遺跡の実態を把握し、今後の埋蔵文化財行政を遂行する基礎資料として活かしたい。

2 丸瀧遺跡と周辺地域の柱根樹種について (第 5 表)

丸瀧遺跡出土の柱根は、放射性炭素年代測定の結果から 1 の丸材が飛鳥時代頃、3 の角材が古墳時代中～後期頃の年代が得られた。また、樹種はともに角材の 2・3 がクリで共通するのに対し、1 はコナラ属コナラ亜属コナラ節で年代差に関連したように両者は異なっていた。この分析結果をこれまで加茂市周辺の遺跡から得られている柱根などの樹種を時期別に整理する中で検討して見たい。

クリは縄文時代～近世の遺跡で確認されているが、調査事例が多いこともあり、古代 V～VII 期に多く認められる。しかし、本遺跡周辺ではこれまで古墳時代のクリの用例は未確認であった。阿賀北、蒲原、頸城各地の遺跡からはクリが確認されている〔春日 2008〕。クリの確認例が少ないことは本遺跡周辺の地域性なのか調査例の多寡が関係するのか今後注視したい。なお、本地域の古墳時代の遺跡では多様な樹種が用いられ、古代以降には確認されていないヤマグワやヤマウルシなどがあることは注目される。

コナラ属コナラ亜属コナラ節は鬼倉遺跡の杭を除くと柱根としては確認例が少ない樹種であるが、加茂市周辺では、古墳時代中期と古代 VI 期の遺跡で確認されている。県内各地域でも古墳時代～中世にかけて確認されている〔春日 2008〕。

県内全域の遺跡を検討した春日氏によれば、古墳時代にはクリ以外の広葉樹が多く確認され、時期が下るにつれクリ・スギが増加し、古代Ⅶ期以降はクリ・スギが柱材の大半を占めるようになることが指摘されている〔春日 2008〕。加茂市周辺の遺跡では、スギの様相は資料が少なく不明であるが、クリやほかの広葉樹の様相は春日氏の指摘と同様の傾向が読み取れる。さらに細かい地域差や時期別の特徴があるのか、今後も資料の増加を待って検討する必要がある。

所在地	遺跡名	時 期	種 類	樹 種																			備 考	文 献									
				スギ	ヒノキ	コナラ	クマノエ	アサ	ヤマノ	モリ	エノキ	ハシ	カ	サ	シ	ク	カ	ヤ	ク	ハ	シ	ク											
田上町	川船河遺跡	縄文時代前期後半	柱根	1																	1	伊藤 1996											
三原市	古津川遺跡	古墳時代前期前半	柱根			4					1										3	6	田村・細野・宮田 2008										
			副材など	2				1	2												1	1	8										
加茂市	丸沼遺跡	古墳時代前期後半	柱根												1						1	1	7	科学分館報告から									
	新道遺跡	古墳時代前期後半	木炭												1						2	2	3	伊藤・平田ほか 2000									
三原市	石地遺跡	古墳時代中期	柱根			1	1															2	7	伊藤・平田ほか 2000									
加茂市	丸沼遺跡	古墳時代中期～後半	柱根			2			2													2	7	田村・長田・宮田 2008b									
		古代早期	柱根			2																1	2	本吉									
			柱根			1																1	2	本吉									
三原市	藤ノ木遺跡	古代Ⅷ期	柱根			2																2	2	報告書本文記載から									
			副材など					15															10	田村・長田・宮田 2008c									
	新田河遺跡	古代Ⅷ期	柱根																			1	1	科学分館報告から									
加茂市	馬越遺跡	古代Ⅷ期	柱根			9			1	1											2		13	伊藤 2005a・2009・2010a									
			杭			2																	2	伊藤 2009									
三原市	東越寺遺跡	古代Ⅷ期	柱根			2																2	2	遺構報告記載から									
			柱根			3			1	7												1	2	3	金子・田村 1997								
加茂市	亀谷遺跡	古代Ⅷ期	柱根			1	5		5	2												1	2	3	伊藤 2001								
	馬越遺跡	古代Ⅷ期	柱根			12			3	1												1	2	1	20	伊藤 2005a・2010a							
	太田遺跡	古代Ⅷ期	柱根			9																		10	伊藤 2011a								
三原市	白出町遺跡	古代Ⅷ期	柱根			16			1															21	田村・長田・伊藤 2008								
		古代Ⅷ期	柱根	1	1	4			1	2														15	科学分館報告から								
		古代Ⅷ期	柱根			17			4															21	伊藤 2005a・2010a								
		古代	柱根			4			1	1														7	伊藤 2005a								
		古代	礎石			1																		1	伊藤 2005a・2010a								
加茂市	馬越遺跡	古代～中期	杭			5			2	6		2			1							2	2	18	伊藤 2010a								
		鎌倉時代	柱根			1			1	1														3	伊藤 2010a								
		江戸時代	柱根			2																		2	伊藤 2010b								
	合 計					4	1	30	1	8	2	21	20	2	1	14	4	2	1	2	1	2	2	2	1	6	1	2	3	7	9	2	226

※ 表式については、「春日 2008」を参考とした。
 ※ 初期の9中、古代については「春日 1999」の編年を用いている。

第 5 表 加茂市周辺の柱根樹種一覧

引用・参考文献

- 伊藤秀和 1993 『加茂市文化財調査報告(4) 牛ヶ沢 B 遺跡—新潟県加茂市宮寄上牛ヶ沢 B 遺跡発掘調査報告書』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1996 『田上町埋蔵文化財調査報告書第7集 川船河遺跡—新潟経営大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』田上町教育委員会
- 伊藤秀和 1997 『加茂市文化財調査報告(7) 平成8年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 丸瀨遺跡 鬼倉遺跡 馬越遺跡 蚊口太遺跡 寺屋敷遺跡 馬寄遺跡』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1998 『加茂市文化財調査報告(8) 平成9年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 丸瀨遺跡 新通遺跡 馬越遺跡 上條館跡 中沢遺跡 石川遺跡』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1999 『加茂市文化財調査報告(9) 平成10年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 たて屋敷遺跡 蚊口太遺跡 草生津遺跡 伝洒泉寺跡遺跡 大塚遺跡 馬越遺跡 鬼倉遺跡』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2000 『加茂市文化財調査報告(11) 平成11年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 たて屋敷遺跡 古見道遺跡 中沢遺跡 岩野原 A 遺跡 馬寄遺跡周辺地 山伏塚遺跡 舞台遺跡 横土原遺跡 稲荷浦遺跡 西吉津川遺跡 天神林地内』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2001 『加茂市文化財調査報告(13) 鬼倉遺跡—国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書—』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2003 『加茂市大塚遺跡採集の土師器について』『越佐補遺些』第8号 越佐補遺些の会
- 伊藤秀和 2005a 『加茂市文化財調査報告(14) 馬越遺跡—国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書—』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2005b 『加茂市文化財調査報告(15) 平成15年度 加茂市内遺跡確認調査報告書—西吉津川遺跡 馬越遺跡 太田遺跡 寺下遺跡 城下遺跡 伝下屋敷館跡 割沢遺跡 中沢遺跡—』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2008 『加茂市文化財調査報告(17) 平成17年度 平成18年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 丸瀨遺跡 五反田地区 中沢遺跡 草生津遺跡』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2009 『加茂市文化財調査報告(18) 馬越遺跡Ⅱ—一般国道403号交通連携事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書—』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2010a 『加茂市文化財調査報告(19) 馬越遺跡Ⅲ—県営吉津川地区ほ場整備事業及び送ガス管移設工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書—』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2010b 『加茂市文化財調査報告(20) 平成19年度 平成20年度 平成21年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 五反田地区 山島新田地区 加茂新田地区 鶴倉地区 堀割遺跡 古見道遺跡 西吉津川遺跡 馬越遺跡 荒又遺跡 太田遺跡 舞台遺跡周辺地 陣ヶ峰遺跡 陣ヶ峰北遺跡』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2011a 『加茂市文化財調査報告(21) 荒又遺跡 太田遺跡—県営ほ場整備事業吉津川地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書—』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2011b 『加茂市文化財調査報告(22) 平成22年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 たて屋敷遺跡 元狭口遺跡 中沢遺跡 後須田地区』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和・平岡和夫¹³⁾ 2000 『加茂市文化財調査報告(10) 丸瀨遺跡—新通遺跡—国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書—』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和・立木宏明 2012 『加茂市文化財調査報告(23) 平成23年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 馬越遺跡 周辺地 元狭口遺跡 中沢遺跡 鬼倉遺跡 丸山遺跡 花立遺跡 舞台遺跡 たて屋敷遺跡 周辺地 太田遺跡 横江遺跡』加茂市教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1997 『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修
- 春日貞実 1999 『第4章—第2節 土器編年と地域性』『新潟県の考古学』高志書院

- 春日真実 2008 「越後における古墳時代～中世の柱材について」『新潟考古』第19号 新潟県考古学会
- 春日真実 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第228集 一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅷ 北陸新幹線関係発掘調査報告書XXII 山岸遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子正典・田村浩司 1997 『三条市文化財調査報告書第8号 来迎寺遺跡－布施谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』三条市教育委員会
- 高橋雅弘 1997 「加茂市内及びその周辺の中世城館跡（その一）－七谷地区を中心に（上）－」『加茂郷土誌』第19号 加茂郷土調査研究会
- 田中恵津子・依田賢仁・伊藤俊治 2006 『三条市文化財調査報告書第15号 西吉津川遺跡 白山B遺跡 府敬遺跡－限営ほ場整備事業吉津川地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』三条市教育委員会
- 田村浩司・細野高伯・宮田志保 2008 『三条市文化財調査報告書第21号 吉津川遺跡－一般国道403号交通連携事業（三条北バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』三条市教育委員会
- 田村浩司・長沼吉嗣・宮田志保 2008a 『三条市文化財調査報告書第22号 新田川遺跡－一般国道403号交通連携事業（三条北バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』三条市教育委員会
- 田村浩司・長沼吉嗣・宮田志保 2008b 『三条市文化財調査報告書第23号 谷地遺跡－一般国道403号交通連携事業（三条北バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』三条市教育委員会
- 田村浩司・長沼吉嗣・宮田志保 2008c 『三条市文化財調査報告書第24号 藤ノ木遺跡－一般国道403号交通連携事業（三条北バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』三条市教育委員会

別 表

凡 例

木製品

- 1 法 量 大きさは断面の張り出し部分以外の最大径を計測した。
- 2 本取り (春日 2008) を参考にした。
- 3 断面形 (春日 2012) を参考にした。
- 4 底面形 (春日 2012) を参考にした。

土 器

- 1 法 量 基径付きの数値は遺存率が低く、推定値を含む。
- 2 残存率 ※/36 で残存割合を示した。
- 3 含有物 土器の胎土中に含まれる異物などについて記した。
「石」は石英石、「長」は長石、「砂」は砂粒。「海針」は海面骨針を表す。
- 4 検 成 観察者の主観的判断で「良好」、「差」、「不良」に分類した。
- 5 色 調 「新加坡出土色帖」(小山・竹原 1997) の記号を記した。
- 6 手 法 特徴的な手法のみ記した。
- 7 備 考 主に付着物や風化劣化地を記した。

別表 1 丸渦遺跡 木製品観察表

図 No. 報告号	種 別	樹 種	法 量 (cm)			本取り	断面形	底面形	備 考
			長さ	太さ	厚さ				
9-1	柱根	コナラ属コナラ亜属コナラ類	48.0	18.2		芯持ち丸木	円形	尖底	年代測定
9-2	柱根	クリ	81.0	18.5	9.7	芯取りミカン割	多角形	割め	
9-3	柱根	クリ	73.5	22.7	12.9	芯取りミカン割	多角形	割め	年代測定

別表 2 中沢遺跡 土器観察表

図 No. 報告号	種 別	器 種	法 量 (cm)			残存率		胎 土 含有物	検 成	色 調		手 法		備 考
			口径	底径	器高	口縁	底部			外面	内面	外面	内面	
27-1	須恵器	横瓶						石・長 差	10YR4/1 褐色	5Y6/1 灰	平行タタキ	平行当て具	2トレンチ 小口断面	
27-2	須恵器	壺						石・長 差	N 6/ 灰	2.5Y6/1 黄灰	平行タタキ	同心円当て具	外面自然蝕 小口断面	
27-3	土師器	無台陶	11.6			4/36		石・海針 差	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
27-4	土師器	無台陶 (12.0)				3/36		石・砂 差	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	2トレンチ	
27-5	土師器	無台陶	14.4			3/36		石・砂 差	2.5Y8/1 灰白	10YR7/2 にふい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	2トレンチ	
27-6	土師器	長壺	20.2			8/36		石・砂 差	10YR7/3 にふい黄緑	10YR7/2 にふい黄緑	カキメ、 ロクロナデ	カキメ、 ロクロナデ	2トレンチ	
27-7	土師器	長壺						石・砂 差	10YR7/3 にふい黄緑	10YR7/2 にふい黄緑	カキメ、 平行タタキ	ナデ、 同心円当て具	2トレンチ	

写真図版



新通遺跡 調査地西側遠景 (南東から)



新通遺跡 調査地西側近景 (北西から)



新通遺跡 調査地東側近景 (南東から)



新通遺跡 6トレンチ調査風景 (南東から)



新通遺跡 8トレンチ調査風景 (南東から)



新通遺跡 13トレンチ調査風景 (南東から)



新通遺跡 3トレンチ土層断面 (南東から)



新通遺跡 4トレンチ土層断面 (南東から)



新通遺跡 5 トレンチ土層断面 (南東から)



新通遺跡 7 トレンチ土層断面 (北西から)



新通遺跡 8 トレンチ土層断面 (北西から)



新通遺跡 9 トレンチ土層断面 (北西から)



新通遺跡 10 トレンチ土層断面 (北西から)



新通遺跡 11 トレンチ土層断面 (南東から)



新通遺跡 12 トレンチ土層断面 (南東から)



新通遺跡 13 トレンチ土層断面 (北西から)



丸潟遺跡 調査地遠景（北東から）



丸潟遺跡 調査地西側近景（南から）



丸潟遺跡 調査地東側近景（西から）



丸潟遺跡 1 トレンチ調査風景（北西から）



丸潟遺跡 11 トレンチ調査風景（南から）



丸潟遺跡 1 トレンチ土層断面（南東から）



丸潟遺跡 1 トレンチ柱根検出状況（北西から）



丸潟遺跡 5 トレンチ土層断面（南東から）



丸潟遺跡 7 トレンチ土層断面 (南東から)



丸潟遺跡 12 トレンチ土層断面 (南東から)



1



3

3 底面アップ
(縮尺は任意)

2



館屋敷館跡 調査地近景 (西から)



館屋敷館跡 調査地近景 (東から)



館屋敷館跡 1 トレンチ調査風景 (北西から)



館屋敷館跡 2 トレンチ調査風景 (南から)



館屋敷館跡 1 トレンチ土層断面 (東から)



館屋敷館跡 1 トレンチ土層断面 (北東から)



館屋敷館跡 2 トレンチ土層断面 (西から)



元狭口遺跡 調査風景 (北東から)



大塚遺跡 調査地近景（東から）



大塚遺跡 調査地近景（北西から）



大塚遺跡 5 トレンチ調査風景（北西から）



大塚遺跡 6 トレンチ調査風景（北西から）



大塚遺跡 1 トレンチ土層断面（北から）



大塚遺跡 2 トレンチ土層断面（北から）



大塚遺跡 5 トレンチ土層断面（北から）



大塚遺跡 6 トレンチ土層断面（北から）



花立遺跡 調査風景 (北西から)



花立遺跡 調査風景 (西から)



花立遺跡 調査風景 (南から)



花立遺跡 調査風景 (南から)



花立遺跡 土層断面 (南東から)



花立遺跡 調査風景 (北から)



花立遺跡 調査風景 (北から)



花立遺跡 土層断面 (北西から)



宮寄上地内 調査地遠景 (南西から)



宮寄上地内 調査地遠景 (南から)



宮寄上地内 調査地近景 (南から)



宮寄上地内 調査地近景 (南から)



宮寄上地内 調査風景 (北から)



宮寄上地内 トレンチ土層断面 (南東から)



宮寄上地内 トレンチ完掘 (南から)



宮寄上地内 トレンチ深掘り土層断面 (南東から)



中沢遺跡周辺の空中写真



中沢遺跡 調査地近景（北西から）



中沢遺跡 調査地近景（南から）



中沢遺跡 調査地近景（北から）



中沢遺跡 調査地近景（南東から）



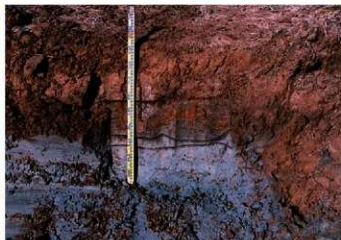
中沢遺跡 1 トレンチ調査風景 (南東から)



中沢遺跡 2 トレンチ調査風景 (南東から)



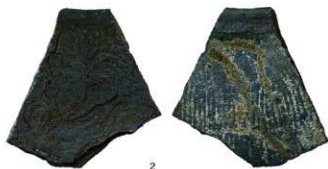
中沢遺跡 1 トレンチ土層断面 (南東から)



中沢遺跡 2 トレンチ土層断面 (南西から)



1



2



3



4



5



6



7

2・6 [1:3]
1・3～5・7 [1:2]

報告書抄録

ふりがな	かもしないいせきかくにちようさほうこくしょ							
書名	平成24年度 加茂市内遺跡確認調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	加茂市文化財調査報告(24)							
編者名	伊藤秀和							
編集機関	加茂市教育委員会 社会教育課							
所在地	〒959-1392 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号 TEL (0256) 52-0080							
発行年月日	西暦 2013年12月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新通遺跡	加茂市大字矢立新田字深切 772-1 番地ほか	15209	162	37度 40分 00秒	139度 01分 48秒	20120521 ~ 20120523	78.5	道路建設工事
丸瀨遺跡	加茂市大字加茂字五反田 2696-1 番地ほか	15209	125	37度 40分 07秒	139度 01分 53秒	20120523 ~ 20120524 20121227	74.2	道路建設工事
館屋敷館跡	加茂市大字下大谷字宮ノ下 340-3 番地ほか	15209	157	37度 36分 57秒	139度 07分 13秒	20120711	12.9	道路建設工事
元狭口遺跡	加茂市大字狭口甲 998 ほか	15209	146	37度 38分 21秒	139度 02分 04秒	20130107		道路建設工事
大塚遺跡	加茂市大字加茂字大塚 2429 番地ほか	15209	126	37度 40分 34秒	139度 02分 22秒	20121225	32	排水路改良工事
花立遺跡	加茂市大字下桑甲 45 番地ほか	15209	104	37度 38分 52秒	139度 02分 11秒	20121015 ~ 20121016		公共下水道工事
舞台遺跡	加茂市大字上桑 9-8 番地ほか	15209	140	37度 39分 38秒	139度 03分 48秒	20120731 ~ 20120807		公共下水道工事
釜淵遺跡	加茂市新栄町 1914-6 番地ほか	15209	103	37度 39分 56秒	139度 02分 21秒	20121009 ~ 20121010		公共下水道工事
宮寄上地内	加茂市大字宮寄上字岩野 447 番地ほか	15209		37度 35分 40秒	139度 07分 29秒	20120829	14.8	携帯電話無線基地局建設工事
中沢遺跡	加茂市大字下桑字中沢乙 385 番地	15209	119	37度 39分 28秒	139度 02分 01秒	20120926 20130325	14.5	携帯電話無線基地局建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新通遺跡	集落跡	古墳						
丸瀨遺跡	集落跡	古墳				柱根		
館屋敷館跡	遺物包含地	中世						
大塚遺跡	遺物包含地	古代						
花立遺跡	遺物包含地	古代						
舞台遺跡	集落跡	中世						
釜淵遺跡	集落跡	古墳						
元狭口遺跡	遺物包含地	中世						
宮寄上地内								
中沢遺跡	集落跡	古代				土師器、須恵器		

加茂市文化財調査報告(24)

平成24年度 加茂市内遺跡確認調査報告書

新通遺跡 丸瀨遺跡 館屋敷館跡 大塚遺跡 花立遺跡
舞台遺跡 釜淵遺跡 元狭口遺跡 宮寄上地内 中沢遺跡

印刷年月日 平成25年12月5日

発行年月日 平成25年12月10日

発行・編集者 加茂市教育委員会
〒959-1392 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号
TEL. 0256 (52) 0080

印刷所 有限会社いとう印刷
〒959-1378 新潟県加茂市駅前4番4号
TEL. 0256 (52) 0696